# Ⅳ-119　城下町起源の都市盛岡の景観イメージの解析

岩手大学工学部　正員　安藤　昭
岩手大学工学部　正員　赤谷　隆一
岩手大学工学部　正員○三上　勉

## 1. 目的

盛岡市民の景観の評価イメージを基に、盛岡市の景観イメージの構造を明らかにすることを目的とした。加えて、市民と専門家及び活動家との景観イメージの比較も行った。

## 2. 研究方法　1）調査対象、調査地域及び回答者

調査対象は盛岡市内及びその周辺の景観であり、調査地域は盛岡市全域である。被調査者は盛岡市に居住する成人男女1500人をランダムサンプリングで選定し、イメージ調査票を郵送した。回答者は404人で回収率は27%である。さらに、この404人に対し第2回目のイメージ調査を行った。回答者は301人で回収率は75%である。また、日常盛岡市の都市計画に携わっている人々（盛岡市役所及び県庁の都市計画課に勤務する人々等……以後専門家と呼ぶ。）114人の中で回答のあった74人（回収率65%）と、市民運動に参画している人々又は町内会の代表（以後活動家と呼ぶ。）120人の中で回答のあった50人（回収率42%）である。

表1. イメージ調査票

盛岡市の景観の印象に関するご質問

年齢 ＿＿＿＿ 年令 ＿＿＿＿ 才

盛岡居住年数 ＿＿＿＿ 年、職業　男　女

Q1. 盛岡駅内および市周辺で好きなところ、または好きな場所（場所）＿＿＿＿から見た（対象）＿＿＿＿は何ですか。思いつくままに出来るだけたくさん具体的に書いて下さい。

Q2. 前ページのQ1で書いたものの中で、最近10年くらいの間に変容的に、良くなってきたと思われるものはどれですか。その番号を思いつく順序にすべて記入して下さい。

Q3. Q1で書いたものの中で最近10年くらいの間に悪い方向に変化してきていると思われるものはどれですか。その番号を思いつく順序にすべて記入して下さい。

Q4. Q1で書いたものの中でこれからでは、ほとんど変化していないと思われる景観はどれですか。その番号を思いつく順序にすべて記入して下さい。

## 2）調査方法，調査時期

本研究では、被験者の景観イメージの確実性を確かめることを目的として、イメージ収束の程度を知るために、同じ内容のイメージ調査を2回行った。第2回目のイメージ調査票には、第1回目のイメージ再生率の集計結果と個票を資料として被験者に再度送付し、イメージを収束させる調査を行った。イメージ調査票は表1に示す。調査時期は市民は第1回目が昭和56年1月5日～24日、第2回目が昭和56年11月2日～25日までである。専門家、活動家も2回目と同様である。

## 3. 解析結果及び考察

イメージ再生率と再生順位のグラフの両軸を対数の目盛で表わしたものを、図1に示す。図1において第1回目と第2回目のグラフが交わる点に注目してみる。イメージ再生率にして約10%，再生順位にして約20位であるこの点を境にして再生順位の上位のものは、イメージ再生率が第2回目の方が上がり、下位のものは、さがる。このことから、この点（イメージ再生率10%，再生順位20位）以上の要素をパブリック・エレメント（共通にイメージされる要素）とし、以下のものは、回答者個自の景観イメージであるとして、パーソナル・エレメントと呼ぶことにする。また、イメージ再生率が25%以上のものを景観イメージの特性を考える上で、特に重要な要素と考え、インポータント・キー・エレメントと呼ぶことにする。

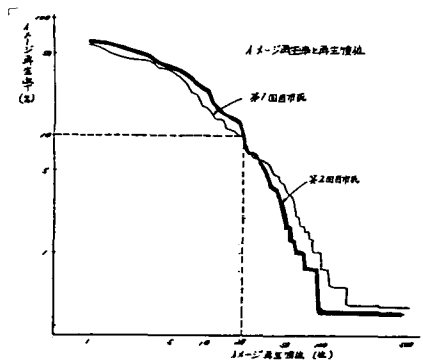


図1. イメージ再生率と再生順位

また、イメージ再生率の集計結果を図2，3に示す。イメージ再生率が10%以上であるパブリック・エレメントを抽出してみると、図2では、公園、庭園、橋梁、河川、人工湖、社寺、公共建築物等の景観が上げられ、図3においては、主として、ランドスケープ景観が上げられる。また図3の開運橋、南大橋、明治橋、夕顔瀬橋は、いずれも北上川にかかる橋である。このことをふまえ、同じ市内を貫流する河川景観である中津川と北上川とを比較してみると、中津川は好きな「ところ」として多くイメージされていることから、場所性が強く、視対象（見られる対象物）としてではなく、むしろ河川公園とも言うべき存在であり、一方、北上川は岩手山を借景としたイメージが強く、「景色」としての

色彩が強いという特性を示している事がわかる。

イメージ再生率が25%以上であるインポータント・キー・エレメントは、岩手公園、岩山、御所湖、四十四田ダム、高松の池、公民館、中津川(図2)、開運橋からの岩手山、岩山からの市内(図3)があげられる。これらのインポータント・キー・エレメントに注目し、盛岡市の景観イメージの特性をまとめると次のように考えられる。1°、岩手公園を中心とする城址仰望景観、2°、中津川、北上川の河川景観に代表される浅流低位景観 3°、岩山緑地を中心とする大景展望景観。これらの特徴的盛岡の景観の骨格とも言うべき3つのタイプの自然景観は、岩手公園からの岩山、中津川、岩山からの岩手公園、中津川、中津川からの岩手公園、岩山といったように、それぞれ視点場(見る地点)一視対象(見られる対象物)の相互の組合せとなって共存している。また、これらの3つのタイプに四十四田、高松、御所湖といった人工湖を加えた4つの景観がそれぞれ個々に岩手山を借景とすることによって、自らの景観をひき締めている点に盛岡の風景の特性がありその優秀性を示すところとなっている。しかし、これらのインポータント・キー・エレメントを中核とするパブリック・エレメントだけではなく、約450項目もの要素があげられているパーソナルエレメントも、都市景観のイメージの奥行を深めるものとして重視する必要がある。

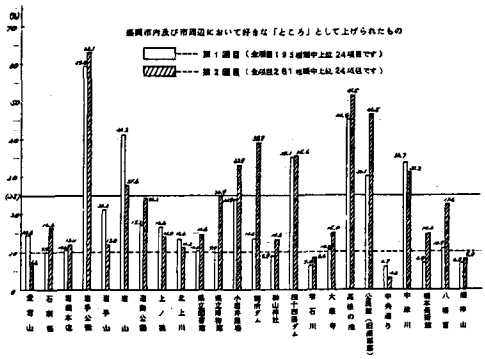


図2 イメージ調査の結果… 好きな「ところ」

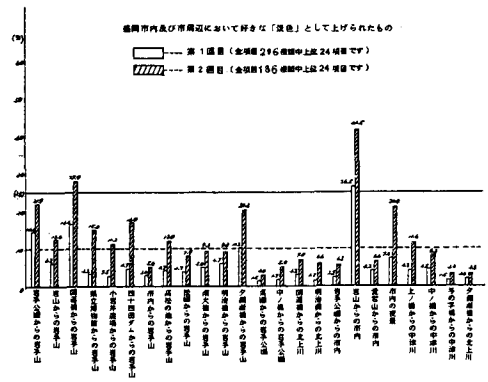


図3 イメージ調査の結果… 好きな「景色」

次に市民と専門家及び活動家との景観イメージの比較について述べる。まず、景観イメージのパターンを比較するために市民と専門家の間でカイ検定(一様性の検定)を行った。その結果有意な差がみられたのは好きな「ところ」だけであった。これは「景色」においては、市民も専門家も同様のパターンでイメージしているが「ところ」においてはイメージの仕方が多少異なるということである。より具体的にどの景観に対するイメージが異なるのかを明らかにするため要素別にイメージ再生率の比較を行った結果、市民の方は、岩手公園中津川等の自然景観に対するイメージが強く、専門家の方は御所湖、大慈寺といった公共事業によって新しく作られたもしくは、公的に保存されている景観に対するイメージが強いという事がわかった。また活動家との比較においても専門家と同様の結果を得た。最近、取り入れられるようになった公聴会での主なメンバーは、この専門家と活動家であり、一般市民とは違った景観イメージを持つこれらの人々の意見を基にした諸種の都市景観対策が真に民意を組み入れたものとは言いがたく、この制度は前向きに評価されなければならないものの多くの問題が含まれているものと考えられる。

4、結論

この研究で得られた結論を要約すると次のように示される。

①イメージ再生率10%の点を境として、再生順位の上位のものはイメージ再生率が上がり、下位のものは下がることからこの点より再生順位の上位のものをパブリック・エレメント、下位のものをパーソナル・エレメントと言える。 ②パブリック・エレメントの中でもイメージ再生率25%以上をインポータント・キー・エレメントとすると、盛岡市の景観イメージ構造は、{(浅流低位の京都型の河川景観、城址仰望の彩根型の盛岡城址公園、大景展望の鹿児島型の自然景観の3つのタイプの相互の関連)+(人工湖景観)}+借景としての岩手山となっている。③同じ都市河川景観でも中津川は場所性が強く、北上川は岩手山を借景としての景観性が強いという特性を持っている。④、市民と専門家及び活動家の景観イメージは、「景色」においては一様のイメージパターンであるが「ところ」においては有意な差がみられる。⑤第1回目及び第2回目で再生された470及び436個のパーソナルエレメントは多様でしかも都市に奥行を生み出す環境要素として重視される。